

博士論文審査結果報告書

関根路代

A Reconsideration of Walt Whitman's American West

(2016年、237頁)

審査論文の要旨・独創性

本論文の目的は、詩人ウォルト・ホイットマンが描いた「西部像」を再考することにある。西部表象に関する先行研究では、詩集『草の葉』出版（1855年）以前に発表された新聞記事、『草の葉』第3版（1860年）に収録された作品、そしてそれ以降は主に散文を中心に検証がなされてきた。著者は、これまであまり論じられることのなかった南北戦争期とそれ以降の詩作品を取り上げ、政治的・文化的・社会的・伝記的な文脈のなかから作品解釈を行い、ホイットマンの西部表象の光と影を明らかにしている。

序論でこのテーマに関連する先行研究を概観し、第1章では次のように論を展開している。

当初ホイットマンは、広大なアメリカ大陸とその多様なジオグラフィーをアメリカの芸術そのものとして見ていた。時を経る中で、アメリカ大陸の原風景が残る西部を民主主義が育つ場所として提示するようになる。西部を理想化する背景には、南北戦争とその後の再建期における過度な物質主義化、また開拓と先住民との関係といった西漸運動が抱える問題が、民主主義を脅かすものとしてあった。詩人が理想化する未来と現実が交差する西部像は、後期の作品に色濃く表れている。南北戦争以前において、語り手である「わたし」は、アメリカの民主主義の何たるかを語り、それを西部に教えようとしていたが、南北戦争後は西部の「大自然の法則」に民主主義の理想を見出し、そこにアメリカのあるべき姿を投影させている。

第2章では、南北戦争後に書かれた詩「レッドウッドの歌」（1874）と戦前に書かれた西部表象の詩の比較から、詩人の西部表象の変化を読み解いている。戦前の作品では詩の語り手が西部に「アメリカの愛」を教えようとしていたが、「レッドウッドの歌」ではその関係性は逆転し、語り手が「レッドウッド」の声に耳を傾ける。先行研究では、「レッドウッドの歌」は進化論の枠組みの中で、人間の優位性を描いた作品として批判的に扱われてきたが、本論ではカリフォルニアという場所の歴史を具現化するジオロジカル（地質学的）な詩として再評価している。

第3章では、大草原の表象を分析し、南北戦争のトラウマの中で、新たなフロンティアを大草原に求めていった詩人の姿を追う。ホイットマンは「草」を民主主義の象徴として描いてきたが、南北戦争後に書かれた大草原の詩においては、その草を育てる肥沃な大草原の大地に注目するようになる。戦死者の死体がバクテリアによって分解され堆肥となり、そこから植物が育つという、エコシステムが機能する場として大草原を捉えている。これまでの研究では、大草原の表象をエコロジックな観点から論じたものはない。ホイットマンは南北戦争後の民主主義には、「自然の法則」が必要だと主張するようになる。急速に資本主義化していく東部（都会）と西部（自然）を対比させ、前者は病的な状態にあり、「自然」がそれを健全な状態にすると説いている。著者は、大草原の平等性と生産性という自然の法則に着目し論を進める。

この章で詳細に論じられる詩「英雄たちの帰還」（1867）では、「レッドウッド」に代わり「大草原の貴婦人」があらゆるものの母として登場する。その母は「レッドウッド」のように雄弁に

語ることはないが、南北戦争後の混乱した状況に癒しと新たな法を与える存在である。著者は、この貴婦人をコロンビア、すなわちマニフェスト・デスティニーを引導する女神と重ねながら論じている。またこの女神は、詩人が祈りを捧げるアメリカ大陸の地母神でもあると主張する。

第4章では、西部表象の枠組みの中で先住民像を検証している。19世紀のアメリカでは、「野蛮人」や「高貴なる野蛮人」といったステレオタイプの先住民像が広まりつつあった。そのどれもが過度にその強靱な身体性を強調している。ホイットマンは先住民をアメリカ大陸の自然と調和して生きてきた「土着の人びと」として理想視していた。しかし白人によって、彼らがリザベーションに追いやられた姿に戸惑いも見せている。

著者は、同時代の詩人ロングフェローの『ハイアワサの歌』(1855)とホイットマンの詩「霧のなかの操舵手」(1885)を比較し、ホイットマンの「痩せた小さな」先住民の特異性に注目し、その理由を考察する。また、「レッド・ジャケット」(1884)と「ヨノンディオ」(1887)の作品分析をとおして、詩人がステレオタイプの先住民像をいかに書き換えようとしたかを論じている。散文においては、ホイットマンは現実の悲惨な先住民の現状を記録しているが、詩においては西部表象のメタファーともいえる先住民をあまり描かなかった。それは詩集『草の葉』が、アメリカのあるべき姿、言い換えれば民主主義の理想を歌うものであるため、現実の先住民を描けば、その理念そのものが破綻しかねないことを詩人が気づいていた。それゆえ詩人は、先住民の地名や言語(音声)を詩のなかに残すことで、先住民像をアメリカのジオグラフィーとして描いたのだ、と結論している。

結論部では、南北戦争以前の語り手である「わたし」は、西部にアメリカの民主主義を教えようとしていたが、南北戦争後は語り手がアメリカ大陸の地霊の声を聞く仲介者となり、場所の物語を語る語り部となる。自然や民衆と安易に一体化することはなく、場所の声に耳をすますホイットマンの受動的な側面が確認される。語り部、あるいは預言者として詩人像は、20世紀のウィリアム・カーロス・ウィリアムズやアレン・ギンズバーグといった詩人たちへと継承されたと論を結んでいる。

審査の総評

第1章のホイットマンの詩に見られる「自然の法則」を、現代のエコシステム理論との関係から論じているのは斬新な試みといえる。第2章のレッドウッドの語り部をカリフォルニアの地霊の声と解釈し、それを次章の女神像と結びつけて論じているところに本論の特色がうかがえる。第3章で論じられる「英雄たちの帰還」の作品解釈からは、ホイットマンの「大平原」表象が明快に論じられている。第4章では、詩集『草の葉』という羊皮紙に、上書きされ消されていた先住民像が浮かび上がってくる。以上が本論の特色といえるが、結論部の後続の詩人たちについての部分は、論のテーマとは直接結びつかないという指摘や、独自性を追求するあまり、若干バランスに欠ける言説がみられるというコメントもあった。

本論文は、これまでホイットマン研究の対象としてあまり取り上げられることのなかった、南北戦争後の西部表象の詩に独自の解釈を示している。19世紀アメリカを論じるための基本的文献や必要な先行研究を十分に消化し、論を組み立てている。ホイットマンの詩以外の作品にも目配りがされており、詩集『草の葉』の版の違いによるヴァリエーションも丁寧に考察している。明晰な英文にも好感が持てる。関根論文は、ホイットマン研究、ひいてはホイットマンに始まるアメリカ詩研究に貢献する研究といえる。審査委員会は全員一致で、本論文が博士(英米文学)の学位に十分値するものと判断する。